

患者を生きる

3934

職場で

不妊治療②

大阪府豊中市の社会科講師、木下優里さん(37)は2012年、市内の「園田桃代ARTクリニック」で不妊症と診断され、本格的な治療を始めた。

不妊治療は一般的に、医師が推定した排卵日に夫婦生活をもつ「タイミング法」、動きのよい精子を排卵日に子宮内に入れる「人工授精」、卵巣から卵子をとりだし(採卵)、受精させて子宮に移植する「体外受精」と進む。

木下さんは以前、別の医院でタイミング法を1年以上していたため、「人工授精」から始めた。

授精のタイミングを排卵日できるかぎり一致させる必要があった。卵子を包む「卵胞」の成長を

通院増え 退職も考えた

超音波で調べ、排卵日を見極めたうえで、授精の日を決める。

排卵日の予測は簡単ではなく、最低月2回の通院が必要だった。「仕事をセーブしなければ」と、勤める私立中高一貫校の上司や同僚らに治療について話し、受け持つ社会科の授業数を半分ほどに減らしてもらった。打ち明けると、不妊治療経験のない男性の同僚らも「知らん世界やけど大変なんやな」と理解を示してくれた。

毎月、授精の日は妊娠への期待で気分は高揚し、妊娠に至らずに生理が来ると一気に落ちた。気持ちの浮き沈みは、まるでジェットコースターのようだった。

5回、人工授精を試したが、い

ずれもうまくいかず、体外受精に進むことになった。

体外受精になると、仕事への影響は大きくなった。最もよい採卵



生まれたばかりの駿希くんと木下さん。夫婦で一字ずつ思いを込めた字を出し合い名前を決めた。2014年4月、木下さん提供

日を探るため、月経が始まり2週間以内に4〜5回の通院が必要になったからだ。その間、自宅では、卵胞の発育を促すホルモン剤を、自分で下腹部に注射した。

「もう仕事はやめなさいといけないかも……」。思い詰めて、一度は上司に伝えた。

そんなとき、クリニックの看護師の佐々木真紀さん(52)に声をかけられた。悩みを話すと、「仕事は持っていた方がいい。治療だけだと苦しくなってしまう」と助言され、退職を思いとどまった。

受精卵は五つ凍結した。1回目の移植はうまくいかなかった。「どうにでもなれ」と臨んだ2回目の移植で、待望の妊娠。14年4月、駿希くんを出産した。

(水戸部六美)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryoy-k@asahi.comへお寄せください。